

合評会『世界の中のラテンアメリカ政治』を読む ——報告と議論——

Joint Book Review, Reading *Latin American Politics in the World*: Presentation and Discussion

舛方 周一郎

MASUKATA Shuichiro

東京外国語大学世界言語社会教育センター
Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Centre

受田 宏之

UKETA Hiroyuki

東京大学大学院総合文化研究科
The University of Tokyo, Graduate School of Arts and Sciences

鈴木 茂

SUZUKI Shigeru

名古屋外国語大学世界共生学部
Nagoya University of Foreign Studies, School of Global Governance and Collaboration

池田 和希

IKEDA Kazuki

東京外国語大学国際関係研究所
Tokyo University of Foreign Studies, Institute of International Relations

宮地 隆廣

MIYACHI Takahiro

東京大学大学院総合文化研究科
The University of Tokyo, Graduate School of Arts and Sciences

大内 宏信

OUCHI Hironobu

東京外国語大学出版会
Tokyo University of Foreign Studies Press

キーワード

ラテンアメリカ政治 合評会 東京外国語大学

Keywords

Latin American Politics; Joint Book Review; Tokyo University of Foreign Studies

原稿受理日：2023.10.23.

Quadrante, No. 26 (2024), pp. 11–32.

目次

書評 1：ラテンアメリカ政治の複雑さと醍醐味
(受田宏之)

書評 2：ブラジルとラテンアメリカ史の視点から
(鈴木茂)

書評 3：ヨーロッパ政治の視点から
(池田和希)

著者（宮地隆廣／舛方周一郎）リプライ
質疑応答
出版会編集者（大内宏信）コメント

舛方周一郎：定刻となりましたので、合評会『世界の中のラテンアメリカ政治』を読む』を始めたいと思います。本日は休日の午後にも



区分	終 点	ラテンアメリカ	日 本	欧 米
先植民地期	1492 年	先住民による統治	室町時代まで 天皇と武家の統治	古代・中世 王制
植民地期	1820 年 前後	ヨーロッパ王朝統治	江戸時代後期まで 武家の統治	主権国家体制 市民革命
国家形成期	1900 年 前後	独立 保守主義と自由主義	明治時代後期まで 民主制の部分的導入	「第一の波」 米国の台頭
積極国家期	1980 年 前後	ポピュリズム 政府主導の開発戦略 軍事政権	昭和時代後期まで 戦時統制と民主化 高度経済成長	「第二の波」 二度の大戦 冷戦
消極国家期	2000 年 前後	民主化 新自由主義	平成時代前半まで 55 年体制の終焉	「第三の波」 冷戦の終焉
ポスト 消極国家期	現在	「左傾化」 一部の国の専制化	現在まで 自民党の政権復帰	民主制の後退

表 1：ラテンアメリカ政治史の時代区分と各地の対応
(出典：本書 p.32、表 1-5 を元に作図)

従来の教科書

『世界の中の
ラテンアメリカ政治』

かかわらず、本学東京外国語大学までお越しく
ださり誠にありがとうございます。『世界の中の
ラテンアメリカ政治』が東京外国語大学出版
会より 2023 年の 3 月 27 日に発売されて 3 ヶ
月が経ちました。3 ヶ月が経ち様々な方からご
好評をいただいておりますが、この時期に既
に読んでくださっているかた以外にも今後もこ
の本を手にとっていただきたいという気持ちを
込めて、合評会を東京外国語大学・海外事情
研究所で企画しました。私は東京外国語大学
でポルトガル語とブラジル政治を教えておりま
す舛方と申します。本日はどうぞよろしくお願
いいたします。今回は 2 時間という限られた時
間でこの合評会を行なうにあたり、まずこの『世
界の中のラテンアメリカ政治』がどういったも
のなのか説明し、そのあとで本日のスケジュー
ルも簡単に紹介させていただきます。

* * *

地域と世界を往還する思考

ラテンアメリカはアメリカ大陸とその周辺の
島々の中でも、米国よりも南に位置する場所
です。そのラテンアメリカは先植民地期から
1800 年代の独立期を経て現代に至るまで類
似した経験を共有しつつも、同時にその経験
に反応してきた各国が、様々な政治的な特徴
を示してきた場所です。この本の第一の狙い
は複雑に絡み合う国際社会との関係、歴史の
変遷を丁寧に読みながら、先植民地期から現
代まで、日本や欧米諸国などと対比しつつ、ラ
テンアメリカの政治史の全体像を俯瞰すること
です。その点で新しい概説書になるように本書
を書きました。本書を執筆するにあたり意識し
たのは、これまでのラテンアメリカ政治の教科
書との違いをはっきりさせたいということでした。
ラテンアメリカ諸国に共通するような経験は、
ラテンアメリカを取り巻く、世界の動向に
関連しつつも、特に高校の世界史や日本史で
は盲点になっており、その傾向は近年強まって
いると実感していたためです。したがって本書
の試みにより、欧米諸国だけでなく、アジア太
平洋、中東やアフリカなど、ほかの国とも一致

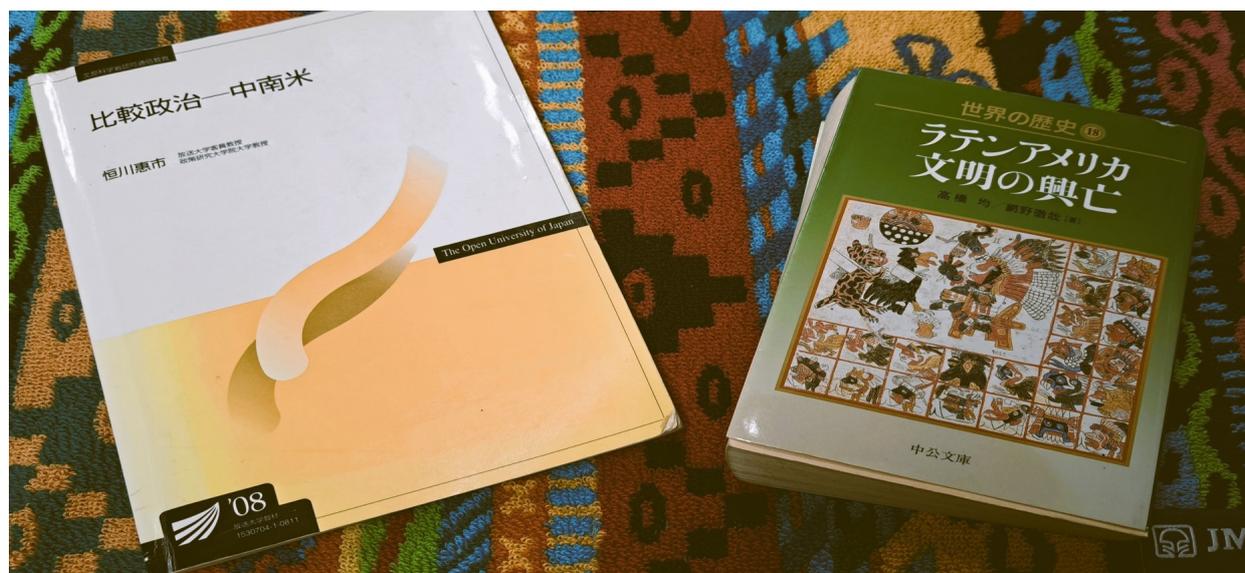


図2：巨人（二大巨頭）の肩のうえに立つ（出典：舛方撮影）

するラテンアメリカ政治の魅力を伝えたいという狙いもあります。本書はまた2022年4月から高校の必修科目ともなった「歴史総合」との橋渡しや比較政治学の副教材としても活用してもらえたらという思いも込めています。

さらにラテンアメリカ政治の経験をそれ以外の国々とも関連させるために日常に触れる世界のニュースのキーワードも説明したいということもありました。普段ニュースを見ていても今ラテンアメリカがどのような状況になっているのか理解するのが難しい。ラテンアメリカのことに関心ある人がこの本を取ってくださるとはおもうものの、それ以外の地域の方もこの本を読んで「なるほど」と思ってもらいたいという狙いもあります。そこで民主制や国家など政治学の基本的な概念も説明する役割も備えており、特にラテンアメリカで起こる現象の原因を地域特有の文化によるものだというふうに決めつけずに、その文化とは一体何なのかも丁寧に示したいという思いがありました。

このように（前頁表1参照）通常のラテンアメリカの従来の教科書ではラテンアメリカ政治の時代的区分からすれば時代の区分ができるものの、ラテンアメリカ域内の中で起きる内容に説明が限定されてきました。しかし、これは

いまの高校生には理解しづらいということもあり、まず同じ時期の日本や欧米との横との繋がりも踏まえた形で本書を捉えていただきたい。そうした狙いも込めております。そこで各章の最初に導入として、欧米と日本の当時の状況はどうだったのかを説明し、その背景を前提としたうえでラテンアメリカの話に入る構成としております。

宮地先生と一緒に本書を書こうと決めた時、これまでの教科書と同じものを作っただけではないということを考えていました。本書はラテンアメリカ研究の二大巨頭でもある恒川先生の『比較政治—中南米』と今年〔2023年〕3月まで本学〔東京外国語大学〕にいらっしゃった高橋均先生が書かれた『ラテンアメリカ文明の興亡』を我々が目標にすべき本として定めています。しかし、これらの本も主に民主化に関しては近年の政治学が達成した理論的發展を踏まえていなかったし、21世紀に大きな変化を見せたラテンアメリカの状況を体系化できていない課題を抱えていました。本書は先生たちが残した課題を最新の研究成果をいかして克服するとともに、2010年代以降のラテンアメリカ政治変動の説明も含めたものとしています。

本書の目次は1章から12章までとなっています。今日もさまざまな方に来ていただいておりますが、特に伝えたいことはこの本がもう作られたので終わりではなくて、今後も長く使ってもらえるような仕組みもさまざま工夫をしていることです。詳しくはこの『世界の中のラテンアメリカ政治』のウェブサイトをご覧ください。このウェブサイトの中では本の中では書ききれなかったこともコラムとして書いています。このコラムの作成も今後、継続していきたいと考えています。

* * *

本日のスケジュール

本日のスケジュールとしては、まずは3名の討論者にご登壇いただきます。ラテンアメリカ地域研究の視点から東京大学の受田先生、ブラジルとラテンアメリカ史の視点から鈴木先生、さらにこの本はラテンアメリカの政治に関するものであるものの、違った地域からの視点が欲しいこともあり、ヨーロッパ政治の視点から池田先生に討論者をお願いしている次第です。ここままで大体一人15分くらいお話していただき、10分間の休憩を取ります。ここで時間の調整をして全体で討論する予定です。時間はたっぷりとっておりますので、ぜひ今日来てくださった方からもコメントを期待しています。ぜひお気軽に対面という機会を通じて、ここが面白かったとか、こういうところを改善したほうがいいんじゃないかということも考えていけたらいいなと思います。では討論の方初めて参ります。まずは受田先生からどうぞよろしく申し上げます。

* * *

書評 1

ラテンアメリカ政治の複雑さと醍醐味

受田宏之：東京大学の受田です。私はメキシコをフィールドに、主にラテンアメリカの経済や社会のことを勉強していますので、的外れなことをいうかもしれませんが、ご寛恕いただけたらと思います。教科書を楽しませていただいたのですが、まずこの教科書が達成したことについて説明し、続いて考えたことを述べさせていただきます。

何より、扱う範囲が広いということがあります。普通ラテンアメリカのテキストというと、大国であるメキシコやブラジル、アルゼンチンやペルーといった国々についての記述が増えてしまうものですが、コスタリカという小国だけ個性豊かな国や、「最貧国」とか「崩壊国家」としてネガティブに論じられることが多いハイチについても論じられています。きめの細かい、カバーする範囲が広いテキストです。扱う時代についても、先植民地期から21世紀までを扱っています。特に、21世紀のポスト消極国家期は、その前の消極国家期に新自由主義化が進んだのに対し、一次産品ブームがあり、政治的には左傾化、左傾化した国々の一部の権威主義化など、いろんな動向がみられたわけですが、それらについても丁寧な論述があります。

二つ目の達成として、記述が正確です。質的データについては、できるだけ加工し整理された形で示されています。また、V-Dem（民主主義の多様性）をはじめとする数量データも適宜使われています。東京外国語大学出版会のホームページに補助的なデータも載っているということで、正確さへのこだわりが感じられます。

三つ目のポイントとして、舛方先生も宮地先生も比較政治学を専門とされているということ

で、比較政治学の最新の知見を踏まえています。先ほど舛方先生も話されたように、各章の冒頭で、用いる政治学の分析概念が紹介されています。『世界の中のラテンアメリカ政治』というタイトルについていうと、ラテンアメリカ地域に焦点を当て過ぎると、逆に地域バカというか、海外事情の説明で終わってしまう。ラテンアメリカの政治を世界の動向の中に位置付けるには、理論が必要なわけです。スペイン語やポルトガル語、フランス語を学んだ上で、特定の「現場」を深く知るといふ地域研究の王道を尊重しつつも、現代政治学の展開をおさえていなければいけない。タイトルは、そういった比較政治学者としての志を示しています。

最後の達成として、政治に限らないのですが、ラテンアメリカのテキストは域内の共通性を強調する傾向にありました。経済学の場合だったら、不平等と一次産品依存を軸に、開発モデルの変遷を説明するといった形です。ところが、このテキストは、域内の多様性にも重点をおいています。植民地期の制度遺産である不平等な社会構造、アメリカの覇権主義の影響、1980年代以降の新自由主義の波など、域内を貫く共通性が論じられるのと同時に、顕著な多様性もみられることが示されています。メキシコをフィールドとする者として勉強になったのは、積極国家期、これは経済的には輸入代替工業化によって産業構造の多様化、高度化を図った時期であり、政治的には初期の民主化やポピュリズムの台頭により特徴付けられる時期なのですが、その後、分配をめぐる対立が厳しくなり、冷戦も背景となって、多くの国々で軍部が政権を握るようになります。その後、債務危機とともに消極国家期、新自由主義へと変わっていくわけですが、それは政治的には軍政から民主化への移換の時期でもあったわけです。

メキシコは、輸入代替工業化を経て新自由主義への転換は経験しているものの、ヘゲモニー政党の支配が続いて、軍政を経験してはいません。だから民主化や軍政というと、漠然としたイメージで捉えるところがあったのですが、チリ、アルゼンチン、ブラジル、アンデス諸国、中米諸国について、ペルーの場合は左派の軍政が登場するという風に軍政にもいくつかのパターンがあり、民主化もそれに応じて様々な形をとることが丁寧に整理されていて、有益でした。記述の正確さという点とも関連するのですが、ラテンアメリカのステレオタイプに挑戦し、特定の国のことを学びたい、留学したいというニーズにも答えるテキストとなっています。

私はマルクス主義人類学者のエリック・ウルフの文献をよく読んだのですが、彼の歴史論述はすべてではないにせよ、読みごたえがあります。メキシコの例だったら、征服を経て先住民が社会の最下層を構成するわけですが、時代を経るにつれ、階層分化が進んでいく。政治、経済構造の変動の中に、ブローカー的な位置にある先住民がどうやって自分たちの地位を確保しようとしたのかが描かれているのです。そういった古いテキストの良質の部分を残しつつ、最近のマイクロ計量分析的な政治学の成果も組み合わせようとしている。伝統と新しいものが融合しています。

以上、テキストの達成について私見を述べました。ここで終わるとつまらないので、課題を設定させていただきます。授業で使うテキストないし補助教材としては、本当に優れていると思います。ここ東京外国語大学、あるいは東京大学駒場キャンパスなどラテンアメリカ政治を教えるのが当たり前のところでは、このテキストでいいでしょう。しかし、ラテンアメリカに関心もっていない人にこの本を買わせるまでの魅力と醍醐味にはやや欠けるのではないで

しょうか。ラテンアメリカ関連の文献を読まなきゃいけない、あるいは政治学が好きだったり途上国の開発を専攻したい等の理由で、手にとって読む人はいるでしょう。でも、そうではない人の方が一般的なわけで、なぜラテンアメリカの政治は面白いのだという仕掛けは弱いのかもしれず、この場で皆さんと考えられればと思います。ラテンアメリカの研究者として、大きな問いを投げかけますので、できる範囲でお答えください。

一つ目の質問として、いまラテンアメリカの政治、経済を捉える大きなナラティブとして、新制度学派的な制度決定論があります。それに従うと、植民地期に垂直的な社会の形成された国ほど、経済成長および民主主義の定着は困難になります。事例研究をする、数理的なモデルを組んで統計的な検証も行うなど、包括的で洗練されています。ラテンアメリカの研究者も似た論点を昔から提起してきたのですが、新制度学派は抽象度が高く、普遍志向の理論なので、世界的に流行ることになりました。とはいえ、そのまま受け止めたら、初期条件において不利な国々、社会は悲観主義に陥ってしまいます。低位の均衡から抜け出すには複数の条件を満たさなければならないとするならば、発展などできはしないと突き放された気持ちになるでしょう。ネガティブに描かれる地域を学ぶ動機も弱まることになります。そこで、ラテンアメリカ政治の研究者として、決定論的なナラティブに対して、どう向き合うのかということが一つ目の問いになります。

二つ目の問いですが、「ラテンアメリカはいろいろ課題はあるかもしれないけど、何か面白いことが起きているところだ」というイメージを持つ人、特に若者が少なからずいます。スペイン語は東京外国語大学でも人気ありますが、東京大学ではスペイン語は一番履修者の多い第二外国語です。その理由はというと、

もちろんサッカーと答える男子学生は多いわけですが、ラテンアメリカにポジティブな期待も懐いているわけです。実際、政策や政治的实践において先進的な試みがみられます。アンデスやメキシコにおける先住民運動、ブラジルの参加型予算やアマゾン環境保護運動については、テキストの中でも触れられています。

社会経済面では、条件付きの現金給付や非拠出型の年金等、社会政策の充実を挙げることができます。社会政策にも、さまざまなバリエーションがあります。最近では、非営利、非国家の諸活動を再評価する仕組みとしての連帯経済も含まれるわけですが、ユニークな動向がたくさんあるわけです。

ところが、アンデス諸国の例を挙げるならば、ボリビアでエボ・モラーレス、エクアドルではラファエル・コレアという先住民性を意識した新しい開発を説く政権が登場して、かなりの注目を集めたわけですが、結局は「レンティア・ポピュリズム」と呼ばれるような一次産品依存、民主主義の劣化に陥ってしまう。新しいというけど、大筋は変わっていないじゃないか。ブラジルについても、カルドーゾ政権が築いた土台の上に、ルーラ、ルセフの労働者党政権が社会の分断や政治の不安定化を招くことなく効率と公正のバランスをとっている、国際的にも評価されているという楽観論が、確かに存在したのです。しかし、その後汚職スキャンダルなどで政府の正統性が低下し、ボルソナーロが出てくるわけです。アセモグル、ロビンソンに代表される新制度学派に従えば、制度は権力構造や社会規範など様々な要素が絡み合ってなり立っているんで、ある部分だけ先進的で他は昔のままという状況は長続きしないことになります。

いまあげたようなラテンアメリカの面白さというのは、ローカルな動き、テンポラリーな動きを誇張しているのに過ぎないのであって、所

詮は中進国の罫とか民主主義からの退化というような大きなナラティブに回収されてしまうものなのか。ラテンアメリカの独自性、先進性というのは、マニアや地域研究に任せればいいことで、政治学が扱う対象ではないのか。科学として政治学が一般性を追求するのは当然として、あえてラテンアメリカの政治を学ぶことの積極的な意義はどこにあるのか。お答えにくだいしょうが、ヒントを教えていただければと思います。

最後に、これは私の研究テーマの一つでもあるのですが、テキストの最後で組織犯罪が政治に与える影響について触れられています。私のフィールドのメキシコでは言うに及ばず、ほぼラテンアメリカ全域で、組織犯罪が社会に膨大な直接的、間接的な損失をもたらしているわけです。この損失の中には、民主主義に対する脅威も含まれます。日本への麻薬の密輸が増加する、日本の企業が現地で行う活動が脅かされるといった事態になれば、ラテンアメリカの政治を学ぼうとする若者も減ることでしょう。組織犯罪は、経済的不平等や公の制度への不審を背景に拡大しており、解決が難しい問題です。

そこで、暴力という点では国家の方が犯罪組織よりも強いことから、フィリピンの前ドゥテルテ政権、エルサルバドルの現ブケレ政権のように、軍を動員しつつ強権的に組織犯罪を壊滅に追いやればいいという言説や政治勢力が力を得る可能性があります。こうした強硬策は、人権侵害を伴う他、国家の権威主義化を招くリスクもあります。一方で、テキストにも書かれている国際協調も、アメリカ合衆国とメキシコ、中米諸国間のメリダ・イニシアティブなどがいい例でしょうが、言うは易く行うは難しで、成果を得るのは大変なわけです。歴史を振り返ると、かつては犯罪組織とフォーマルな社会、国家は違う形で共存してきた。今のよ

うに経済を著しく侵食したり、ライバル組織だけでなく市民や国家機構にも暴力を行使するようなことはなかったといえます。そうした「緩やかな形の共存」は、21世紀にはもはやあり得ないのか。組織暴力と政治の関係について、お答えいただけたらと思います。

以上が私からのコメントになります。ありがとうございました。

舛方：受田先生ありがとうございます。では第二報告者の鈴木先生お願いいたします。

* * *

書評 2

ブラジルとラテンアメリカ史の視点から

鈴木茂：ご紹介いただきました鈴木です。もうだいぶ歳が上にいってしましまして、今日は20世紀の後半あたりの話をしますので驚かないでください。私の専門は先ほど舛方さんからご紹介があったように、自分では歴史を勉強してきたつもりです。主なフィールドはブラジルです。この本には新しさを感じました。

一つは、先ほどの受田さんのお話の中にも少し出てきたと思いますが、ラテンアメリカという括りですね。ラテンアメリカの多様性に目配りをして、ラテンアメリカ総体を論じるという問題意識には非常に共感するところがありました。

この本は、ポピュリズムについて独自の、独創的な取り組みをされていると思います。ポピュリズムという共通の理念を持ちつつも、多様性に着目する、あるいは、軍事政権についても多様な性格を持つのだということで、類型化をされている。ラテンアメリカの多様性を意識されている点も非常に共感するところです。それから、先ほどの舛方さんの冒頭のご説明にもあ

りましたが、歴史を重視しておられます。しかも、ラテンアメリカに閉じない。また、19世紀の国家形成期や植民地期の状況が今日の民主制のあり方をいかにして左右するのか、という問いを立てておられます。そのメカニズムはまだ明確ではありませんが、安定した民主制に歴史的起源があることを予想させる対応関係は興味深いですね。証明するのは難しいけれども、この着眼点そのものはこれから追求していくべきものとして、なるほどと思われました。

この本は政治学を全面に出しています。私の普段読むものとは日本語の文体そのものもやや違うところを感じるのですが、きっちりと政治学の概念に基づいて、論じていくというところは、旗幟鮮明です。歴史学などとの違いを感じました。これも先ほどの受田さんのところで出てきましたが、大きなデータに基づいて巨視的に傾向を析出していく、時系的に比較できる指標を利用して全体を見通そうとする。これもやはり政治学の視点なんだろうと思います。歴史学の視点ということであえて言えば、個別の事例の説明とその長期的な傾向はどう整合性をつけられるのかなと思いました。

それから繰り返しになりますが、この本の中でポピュリズムが非常に重要な概念とされておりますが、ラテンアメリカの政治を考える時にポピュリズムというのは非常に重要な手掛かりになるのだということです。その際、歴史的な段階としてポピュリズムを捉えておられるわけですが、これまでもラテンアメリカ政治史の中でポピュリズムは特定の時期と対応させる形で論じられてくることが多かったかと思えます。

では現在のこの、つまり2020年代の、あるいは2000年代に入って以降のいわゆる左派政権とポピュリズムはどういう関係にあるのでしょうか。一般に1930年代、あるいは50年代、60年代の輸入代替工業化の時代、それ

を推進した政治体制がポピュリズムの典型だったといえるかもしれませんが、2000年代に入ってから現在のつながるような状況はどうなんだろうかということです。本書では1900年前後はポピュリズムの前段階、用意した時代であり、ポピュリズムの政治は20世紀の前半だという章立てになっていますが、現在との関係はどうかということですね。

非常に網羅的な本ですので、具体的な論点を取り上げていけばキリがないのですが、二、三点だけ気になったところだけ申し上げます。一つは、ラテンアメリカという空間概念、地域概念についてです。冒頭にラテンアメリカとはどういう地域なのかということで、この本では言語と地理を基準にラテンアメリカを定義されているようです。だからフランス語が入るわけですね。ロマンス語ということ。そこでハイチが入ってくるわけですが、ハイチとジャマイカの違いは何なのでしょう。ラテンアメリカの空間概念はさまざまな呼び名があり、この本でも取り上げられた中南米もあれば、イベロアメリカもありますね。歴史的に構築された概念という視点で考えると、やはりアメリカ・ラティーナのラティーナはエスパニョーラの意味であって、ブラジルは入っていない。当然、時代を遡れば、実効支配はしていませんが、北アメリカも全部スペイン領のはずだったんですね。

細かなことを申し上げれば、ナポレオン3世がメキシコを侵略するときの正当化の論理として、フランスはラテン文明の中心だと言い出しました。これは柳原孝敦さんの御著書『ラテンアメリカのレトリック』に出てくるのですが、同じ19世紀半ば、パリあたりにたくさんいたラテンアメリカ出身の知識人が大文字で、アメリカ・ラティーナと言っていました。ボリバルのパナマ会議でも、ブラジルやアメリカ合衆国は、招待はされていますが、行かなかった。一方、ハイチはパナマ会議から排除されるわ

けですね。ハイチは一種の反面教師ですから、ハイチだけにはなりたくないというのが、ラテンアメリカの独立国のハイチに対する視線だったのではないのでしょうか。キューバのホセ・マルティのいうヌエストラ・アメリカというもの、やはりエスパニョーラだろうと思いますね。要するにアングロ・アメリカ、北米に対する対抗意識です。一方、アメリカ合衆国の視点から言うと、フランクリン・ローズベルトの善隣外交でラテンアメリカを取り込もうとしたとき、世界恐慌の対策としてのドル・ブロックを作る、あるいはさらに戦争になっていったときに自国の同盟国を作る段になると、面白いことにブラジルが入ってくるんですね。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンと一緒に。ついでに申し上げれば、アルゼンチンも果たしてラテンアメリカとしての自己認識があるのか、自明ではないでしょう。

アルゼンチン国民意識にとって、ボリビアやペルーと同じアイデンティティを共有してきたのかどうかですね。ところが、アメリカ合衆国の視点からはアルゼンチンはボリビアやペルー、さらにブラジルと同じラテンアメリカの国なのです。それから、第二次世界大戦後の国際機関の代表的なものが国連のラテンアメリカ経済委員会 (ECLA/CEPAL) があります。今、カリブが入って、英語では C が入って ECLAC になっていますが。このラテンアメリカにはもちろんジャマイカも入っていますし、カリブの全ての国が入っているわけです。歴史的にどこまでがラテンアメリカ、何をもちてラテンアメリカというのかは変遷しています。だからこそ、やはり多様だということにもなると思います。

これに関連して、ハイチの位置付けは複雑です。ハイチは、ある意味、機械的にラテンアメリカに入れられない。一つは、今申し上げたようなハイチ独立の経緯があります。加えてハイチはメキシコとか、中米とか、コロンビア、

ペルーと比べて、むしろブラジルに近い。言うまでもなく黒人奴隷制という共通の経験があるからですね。それから、南北アメリカの中で一種の見捨てられた反面教師として扱われてきたところがあって、ボリーバルも言っていたと思いますが、ハイチだけにはならないように気をつけよう、ということですね。アメリカ合衆国がハイチ独立を承認するのは、奴隷解放予備宣言の直前の 1862 年 6 月です。奴隷反乱を正当化できないというのがアメリカ合衆国のハイチに対する見方ですよ。

ブラジルに関する個別の論点についても気になることはありましたが、あまりここで議論するようなことでもないの、最後に一点だけ、対米関係について気になったことを指摘しておきます。パナマとキューバの独立に関する記述です。パナマは独立直後にアメリカ合衆国と条約を結び云々と書いてありますが、これ本当にアメリカ合衆国と条約を結んだと言えるのでしょうか。つまり、パナマ側で署名した人は誰だったのかということです。ヘイ・ブノー＝ヴァリーヤ条約、ヘイはアメリカ合衆国の国務長官ですが、ブノー＝ヴァリーヤというのは何者かを考えた時に、これは対等な条約ではなかったことがわかります。同じことがキューバの独立にも言えて、アメリカ合衆国がスペインと戦争を起こしたことが契機となってキューバが独立したのではないですね。キューバは 1860 年代から独立運動をやっていました。アメリカ合衆国がそれを利用したわけですから、主語をどう書くかというのは歴史をやってるとちょっと引っかかる場所ですね。その二点だけ指摘して私のコメントにしたいと思います。ありがとうございました。

舛方：鈴木先生ありがとうございます。私は鈴木先生から直接に指導を受けたことはありませんでしたが、まさに大学院で指導を受けたか

のようなコメントが来まして、とても勉強になっております。あとで答えられる範囲で答えたいと思っております。では3人目の池田先生に討論をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

* * *

書評3

ヨーロッパ政治の視点から

池田和希：よろしくお願いいたします。私、東京外国語大学大学院博士後期課程の池田と申します。この度はこのような機会をいただきまして誠にありがとうございます。私は受田先生や鈴木先生とは違う視点でということで、専門はヨーロッパ政治で、政治史と呼ばれるような、計量ではなくて、質的な研究をしている者です。ということで、本日は四つくらいのお話をしようと思っております。

まずは一つ目のイントロ的なところですが、個人的経験というのも含めて、私はラテンアメリカ専門ではなく、ヨーロッパをやっているのですけれども、ヨーロッパをやっている人はやっぱりヨーロッパで固まりがちになって、先ほど舛方先生とお話していたら、やっぱりラテンアメリカもそうだというような話を伺ったところでした。そこで地域を超えて何か話をしようとか、研究をしようというふうになるきっかけということで、政治学者だと何だろうと考えたときに比較政治がそうかなと考えました。

申し遅れましたが、私はイタリアをフィールドにしておりまして、イタリアの政党政治を勉強しているのですが、ここ3年ほどスペインとイタリアの比較研究をやらせていただく機会がありました。そこでテーマは連邦制と分離独立運動の関係をスペインとイタリアの比較でやれないかということでやっていたのですが、壁に

突き当たりました。というのは分離独立運動のほうは良いのですが、連邦制の知見とか連邦制についてどのようなことが言われているだろうというのを勉強しようとするとうまくアメリカ大陸に関するものがすごく多くて、ヨーロッパはドイツとかスイスとか、連邦制の国があることはあるのですが、同じ連邦制でも、アメリカ大陸とはまたちょっと違って、これは困ったなということになりました。そこで、ヨーロッパ以外の人の話を聞くとか、そういう人を呼んできて勉強するみたいなことをしないといけないというのが地域を越えるきっかけでした。

そのようなことを踏まえると、ヨーロッパ政治をやっている自分がこの教科書をどう読もうかなと思った時に、一つは政治史、もう一つは比較政治学という二つの領域を架橋する試みとしてこちらの教科書を拝読いたしました。視点としては二つあるかなというふうに思っていて、一つは素直に概説書として読みました。もう一つは、この本はもちろん研究書ではないので、学術論文とはまた違うスタイルで書かれていると思うのですが、研究の手引きとして読めました。

ということで、次の話に行きますけれども、本書を概説書として読んだ時に、私は他のラテンアメリカの教科書と比べてどうのこうのというのはよくわからないので、政治学とか比較政治学に対して比べてみるとどうかということで読んでみました。本書は、まず政治学の導入としての側面を持っているというふうに感じました。冒頭の23ページで、政治学の教科書だったら絶対に出てくる、「政治とは価値の権威的分配である」という有名どころが出てきたりとか、フアン・リンスの権威主義体制論も簡潔に説明されていたりとか、あとはコラムで要所要所に、政治学の教科書だと絶対に出てくるような概念に触れられています。なので入り口はラテンアメリカだったのだけれども、そ

こから政治学のことに興味を持って、次に何を
読もうかといったときの入口とか導入というよう
な側面を持っているというふうに読みました。

そして、舛方先生の冒頭のお話にもありまし
たが、この本は世界史を意識したということ、
もしくは政治史を軸とした構成になっていると
いうことで、ラテンアメリカ以外の人間からする
とヨーロッパ政治と並べて読むことができました。
ラテンアメリカのことを知っていないと、と
か、そこに対する感覚がないと読むことができ
ないというのがなかったもので、非常に敷居が
低く、触れやすかったです。そして各章の冒頭
第1節あたりでその時代を象徴する出来事が
起こった環境要因や構造の話をも因果関係を念
頭に置いて構成されているので、そこも非常に
読みやすかったというふうに感じました。

同じく本書を概説書として読んでいったとき
に、これも本の冒頭で書かれていることですが、
比較政治学の副読本としてもやはり意識をして
読みました。というのは、まず比較政治学的
な概念とか、注目とかの説明のところ、特に
V-Dem を使って要所要所で説明をされている
というのは、やっぱり比較政治を意識している
というふうに感じましたし、この辺りはヨーロッ
パ政治の分野でこれまでに出版されている教科書より
も意識されているなというふうに感じました。

もう一つは、実際に大学の比較政治学の授
業でこの本を使うようになったときに、ということ
を考えました。比較政治学の教科書というのは
基本的には理論の話の方が多いのですが、結
構理論の背景に具体的なケースがあることが
多くて、特に比較政治学に初めて触れます、と
か、法学部ではなくて、それこそ外大のような
3年生でいきなり政治学に触れます、という学
生に理論を教えるときに、どうしても授業でそ
のケースに触れるということが重要になります。
むしろそのような学生はケースに興味を持って
いたりするので、ケースに触れることが重要だ

とっていて、その際に私のようなヨーロッパ
政治の立場から比較政治学を教える際に困難
に直面することがよくあります。というのは、最
近の比較政治学のトレンドというのはヨーロッ
パ政治の教科書には出てこないようなテーマ
が結構重要だったりして、権威主義体制の持
続はまさにそうですし、やっぱり今比較政治学
の授業をやるのであれば、軍政や内戦に触れ
ないわけにいかないで、その辺りでやっぱり
ヨーロッパ政治の立場で何か授業でケースを
扱おうとか、もしくは扱わないまでも参考文
献の中にそのような本を入れるというふうにな
ったときに、どれを入れれば良いか分からない
というところに直面してしまいます。その際に、
本書は非常に講義に取り入れやすいなという
ふうに読みました。今お話したのが教科書とし
て読んだ時のお話です。

もう一つは、研究の手引きとして読んだとい
う話なのですが、ヨーロッパ政治を研究する、
勉強するとなった時に、いくら地理的な範囲を
ヨーロッパに限っていても、比較政治学的な
動向とか関心とか知見を無視してヨーロッパ政
治を研究するというのが、もはやできないよう
な状況になっているということを感じておりす。
そうなるとうとうと地域を超えて、場合によ
っては地域横断的に、ものを見ないといけない
というようなことが出てきます。その際にラテ
ンアメリカ以外の研究者がこの本を読む時に
提供してくれるものは何かというと、ラテンア
メリカ政治研究者との学術的な対話をするため
の知識であると思いました。少し時間も押して
いますので、具体的なところに触れるのは避け
ますが、スライドにあげたような軍だとかポピ
ュリズムであるとか、新自由主義の導入という
のはまた違う文脈というのがありますので、そ
ちらは非常に参考になりました。

最後に、質問を二つほどしようと思うので
すが、一つ目はもしかしたら冒頭でかなり話され

ていたかもしれないので、もし付け加えることがなければそれはそれで結構なのですが、やはり一番は政治史、世界史を軸とした構成というのがラテンアメリカを知らない人でも読みやすかったなと感じています。教科書を作る際に必ずしも歴史というのを意識せずとも、例えば、ヨーロッパ政治はこのスタイルが多いのですが、一国一章スタイルというのがあるし、もしくはテーマという形で時代をある意味無視して、テーマ別に作るという形もあり得るのだらうと思います。そのようなことを考えた時に政治史をベースに、もしくは世界史をベースにして、比較政治学を意識しつつ、かつ各国を個別に取り上げるのではなくて、あくまで地域を敷衍する、ラテンアメリカという単位で教科書を作るというのは簡単ではなかったと思います。

というのは、地域を敷衍するというようなスタイルにしていっても、実際に構成する時に各節が各国政治史みたいになることもあると思いますし、第1節がイギリスで、第2節がフランスでというイメージになることもあると思います。比較政治学の理論とか概念に触れるということはできても、この本が読みやすかったのはデータを用いて因果関係の説明をちゃんとしてくれているというところで、その辺りの経緯とか意図というのを何か付け加えることがあればお聞かせいただければと思います。

ヨーロッパはどうしても国の数がEU加盟国だけでも27ヶ国あって、政治体制も共和制の国もあれば立憲君主制もあるし、議院内閣制だけかと思いきやフランスみたいな半大統領制もあるし、というような形で中々ヨーロッパという単一の地域として捉えるのが難しいと思ったりします。そう考えるとラテンアメリカのこのような教科書が作れるというのは、ラテンアメリカの外から見ているので、この見方が正しいかどうか分からないのですが、これは地域的

特色なんだろうかとも感じました。

二つ目の質問ですけれども、ラテンアメリカ政治と、言葉があっているのか、言語化が少し難しかったのですが、体制変動について少し気になるところというか、面白いなと思ったところがありました。というのは、この本を読み、ラテンアメリカの政治体制が時代を通して見るともちろん、軍事政権を経験したり、そこから民主化したりとか、変わっているのですが、国家形成期から民政移管に至るまで一つの連続線上にあるように感じられました。体制移行していてもあくまでグラデーションで、どこかで断絶しているという感じがしないような印象を受けました。

そこで改めて、大きいのかなと思ったのは、ヨーロッパ政治だと第一次世界大戦と第二次世界大戦を二つの大きな断絶としてどうしても書くので、そこでまだ一つ時代が切れて、特にイタリアだとそこが断絶になると思います。それに比べるとラテンアメリカでは、両大戦への関与の度合いが低く、それが無いというのは連続性を強く感じた一つの要因なのかなと感じたりもしたところです。本書の中でも域外の国との戦争は乏しかったというふうに書いてありますが、このような読み方というのが果たして妥当なのかどうか。そういう見方もできるかもしれないというようなものなのか、いや、そういう見方はまずいというようなことになるのか、率直な意見で結構ですので教えていただければと思います。

今日スライドをお配りしていないので、細かいリストを見ることができないかもしれないのですが、この報告を考えるにあたってヨーロッパ政治とか比較政治だったらどのような教科書があるのかなということで、スライドのリストに載せているようなものを念頭に置いてお話をしました。ありがとうございました。

舛方：3名の討論者の皆様、事前に準備し、建設的なコメントをくださいます。では、ここで10分間の休憩を取りたいと思います。この間にも何か質問等ある方いらっしゃれば、メモなどにとっておいてください。もちろんその場で挙手していただいても構いません。それではよろしくお願ひします。

* * *

著者からのリプライ

宮地隆廣：ありがとうございます。まず、今回の本を書くにあたって、私が何を考えていたかをお話したいと思います。本というものは読者に向けて書くものですが、今回は自分に向けて書いたところが多分にあります。私はラテンアメリカ政治の講義を複数の大学で10年ほど担当してきましたが、講義の準備にあたっては当然のこととして、過去に出版されたテキストを参照してきました。ただ、学生を前に説明をしている最中、頭の中では「本当にこの説明でいいのか」と思うことがたくさんありました。こうした疑問に答えるようにしながら今回の本を書き上げていきました。

このように、私の中の関心に沿って書き進められたがゆえに、傍から見たら「この記述はいいのか」「随分と記述にムラがあるな」といった批判は当然出てくることになります。そうした批判はちゃんと受け止めて行かなければと思っております。

まず、受田さんからの質問が三点あったわけですが、一つはアセモグルやロビンソンをはじめ、歴史的に作られた仕組みや制度が現在の仕組みを作っているんだという議論についてです。これが正しいとなると、ある種の運命論に陥ってしまい、現在について考える

インプリケーションが中々出てこなくなるのではないかというご指摘でした。

これは、わかりやすい説明が必ず陥る現象です。「全体でこういう傾向があるんです」ということを示し、それで歴史全体が説明できてしまえば、そこから外れるものは存在しないことになります。逆に、あれもこれも例外があると話せば、「じゃあ全体として何が言えるか」ということになります。このあたりのバランスを取るのは非常に難しいところです。

この本はラテンアメリカや世界における全体的な傾向を示しているわけですが、それで多くのことが説明できるというメッセージをどこまで強調するかについては舛方さんと話して決めました。結果的には、全体の傾向はありながらも、やはり個別的には色々な方向性が見えることを示すことになりました。

これはいわば、全体の傾向に全ての事例が収まるわけではない、運命付けられたものから抜け出せることを示しているとも言えます。実はアセモグルやロビンソンも、とりわけアセモグルが特にそうですが、歴史に人類は縛られて終わるのではないと論じています。彼は出身国であるトルコの民主化運動における市民の闘いを支持しています。私もまた、人間が歴史を背負いながらも社会を変えていけると思っていますし、ラテンアメリカ全体の流れの中で各国が色々な方向を示していることもまた、そういう人間の動きの表れだと理解していただければと思います。

二点目であります。ラテンアメリカで見られる様々な社会運動のあり方については、これは最終章で駆け込むように書きました。社会運動が扱う一つ一つのテーマが非常に面白く、それぞれで1冊の本ができてしまうような大きなものでありますし、同時に現在進行中の現象でもありますので、本書における長い歴史の流れの中に位置づけるのは簡単なことではあり

ません。いずれにせよ、各国で様々な運動が上手く行くか否かかという点は、ラテンアメリカの政治の将来に大いに関わってくることに間違いはありません。

三つ目の問い、犯罪組織のようなインフォーマルなものとの共存の話ですけれども、本当に難しい大きなテーマだと思います。私自身はインフォーマリティとはフォーマリティの鏡であると思っています。よく、インフォーマルなものはイリーガルであり、取り締まらなければならないというストレートな答えが出されますが、フォーマルなところで居場所がない、フォーマルなところで生きていけないからインフォーマルなものに人が流れていくことを考えれば、インフォーマリティだけを強く非難しないことは大事なことだと言えます。なお、ラテンアメリカの政治史を見てみると、憲法は作るけれども、実際は内戦に明け暮れるといった、フォーマルな領域に居続ける難しさを感じられる状況が色々なところで見受けられます。このこともまたこの本全体から読み取れるのではないかと思います。

鈴木先生からのコメントですが、やはり非常に大きな問いをいただきました。どう答えるものかを今のいままで考えていて、答えが中々出せずにいます。

まず、ラテンアメリカの概念については、この本のブログでラテンアメリカという概念の政治性を扱うつもりでございました。その概念が様々な思惑に従って使われてきたことは、ラテンアメリカ研究者ならだいたい知っていて、私も全く同感です。ただ、それと同時に、ラテンアメリカという概念を使う人がフランス帝国主義の手先かと言えば、そういうことはないかと思えます。つまり現在では、ラテンアメリカという言葉がある程度、脱政治的な形で共有できていると思います。本書の序章で、中南米という日本独自の概念との対比を意識して、ラ

テンアメリカをシンプルに定義したのも、そうした認識に基づいています。

二点目のハイチの扱いについて、率直に言いますと、ハイチを本書に盛り込もうと言ったのは実は私なのですが、入れて若干後悔しているところがあります。スペイン語圏の国々と比べるという簡単にできないことを安易にやってしまったわけですが、それでも入れようと言ったのには実は理由があります。比較政治や比較経済発展の分野では、同じイスパニョーラ島の中にありながら、ハイチは破綻国家になり、隣のドミニカ共和国は問題こそ色々あるものの、ハイチに比べれば非常に安定した社会や政治を持っているのはどういうことかが集中的に研究されてきました。その成果をやはり記載した方が良いというのがハイチを取り上げた狙いです。無論、ハイチは他のラテンアメリカ諸国とはかなり社会的な文脈が違うので、記述の流れの中にハイチを自然に位置づけることができず、コラムをつなげる形でしかハイチを拾いあげられなかったのは私たちの力不足だろうと思います。

三点目のポピュリズムについては、本書の前半を主に担当した者として言いますと、ポピュリズムという概念に「ラテンアメリカの」という言葉を付けていることがポイントです。昨今言われているポピュリズムは定義があまりに多く、色々なものが全部ポピュリズムと呼べてしまうような状況になっていて、私は分析の概念としての体をなしていないのではないかと感じています。「ラテンアメリカの」と付けておけば、ラテンアメリカ史の文脈で伝統的な定義とされている反オリガルキーの多階級連合という概念であると明確にすることができ、その定義で様々な国の説明にポピュリズムという概念を使うことが可能になります。後半は舛方さんのアイディアに基づいて書かれていますが、ポピュリズムが濫用されていない記述になっているの

を見て、「それでいいのだ」と思っていました。

もう一つ、パナマやキューバの扱いですが、パナマの建国自体が不平等な国家関係の産物であります。キューバの独立についても、その過程に米国が入ってきたことが転換点になっているという書き方はしたもの、独立運動の契機が米国だと書いたつもりはありませんでした。もし誤解を与えるような記述があったのなら、直さなければいけません。

この本は内政を主に扱っているのですが、その説明のために国際関係にも若干触れなければいけません。この結果として、米国も扱わざるを得なかったのですが、記述において気をつけたのは、米国の圧倒的な力でラテンアメリカ政治が動いているという見方は控えるべきだというメッセージを込めることでした。昨今、「米国の裏庭」としてのラテンアメリカという言い方が流行していますが、そのような言い方自体がそもそもラテンアメリカに失礼であると同時に、それは実態を伴ってもいないのだからと私は見ております。ラテンアメリカ諸国、あるいは各国を動かしてきた政治家は米国の圧力を多分に受けていたわけですが、米国の存在を時には利用して、自分の立場を維持しようとしてきた側面もあるのです。

池田さんからは前向きな評価をいただき、大変勇気付けられております。ありがとうございます。一国のことを一章かけて書くというスタイルは過去のラテンアメリカの概説書でよく見られましたし、今後もそういうものが出てくるだろうと思います。本書はそのスタイルから離れ、あくまでラテンアメリカ全体に共通する経験にフォーカスを当てて、それに関連する重要な動きをピックアップするという書き方になっています。

草稿を読んで下さった方からも、一国史の形態になってないから分かりにくいというコメントを頂きました。これへの対応としては、この

本を読みながら、各国史を組み合わせると、理解が深まるのではないかと考えています。最後に、大戦による断絶の話は全くその通りかと思えます。ラテンアメリカの場合、いずれでも戦場にはならなかったもので、二つの大戦が各国の政治に直接的な影響として強く関わってくるということはないように思います。むしろ、大きな政治の変動をもたらしたのは世界恐慌です。

戦争について言えば、チャールズ・ティリーという社会学者が、国家が戦争を作り、戦争が国家を作るという主張をしたことで知られています。総じてラテンアメリカは戦争をしませませんでした。対外的に国民がまとまるきっかけが中々なかった上に、独立後は自由派と保守派が政権を争い、いわば内輪で削り合いをしてきたため、政情不安で経済も成長せず、国家を作るための富も得られなかった。そういう意味で、ラテンアメリカは国家形成の困難な例であると言えるかと思えます。

* * *

舛方周一郎：今日は司会者・筆者・返答という三つの仕事をしています。3名の討論者の方の質問に私なりに返答します。先ほど宮地先生が返答してくださった点に補足する形でお話しできればと思いますが、まず事前に説明すべきだったことを思い出しました。

概説書として本を作るというときに心がけたことがいくつかあります。まずはラテンアメリカ政治と名のつく本はこれまでも多く出版されてきましたが、それぞれが各国史や特定のテーマに合わせた本になっていました。それがラテンアメリカ政治史の全体像を描くことに挑戦するきっかけとなりました。またこうした本を作るときに行われるのは、各章をそれぞれの執筆者が分担して、編者がそれを取りまとめるやり

方です。しかしそうした場合は、編者の方がコメントをするものの、結局は各章ごとにきちんとした議論にならずに本として出版されてしまうということがよくあります。

他方で、この本では共著という形をとったため、文章の一文一文まで二人で本当に何度も何度も読み返して書くという経験ができました。自分ではこうだと思っていたこと、当たり前だと思っていたことについて様々なところで報告したとしてもそこまで他の方と深く議論し合うということはできないものです。しかし、共著では最終的に文章を残すものなので、お互いに考えていることをぶつけ合わないとうまくいきません。私は、ラテンアメリカ政治に関する授業をもっているものの、ブラジル政治を中心に研究してきたので、ラテンアメリカ政治全体については一般的な理解しかできていなかったこともあり、本を出版するために宮地先生に共著を頼みました。とはいえ、ブラジル政治研究者としての矜持というか、プライドというのがあったので、ブラジルに関することでは「ここは変えられない」といったごねたことも何度もありました。そうした点も踏まえて一つの本になったというふうには思っております。

教科書としての本である以上、少ない頁数の中でいかに最大限の説明をするかとなったとき、紋切型の説明をすることになるのではないかと、この点は一番恐ろしかったことでした。これは受田先生のコメントに対する返答にも通じていますが、ラテンアメリカ政治の魅力や醍醐味をどうしたら伝えるかというときに、分かりやすさを求めすぎて、極めて簡単に単純になってしまう傾向があります。どうしても私たちが想定するラテンアメリカのイメージに引きつけた教科書になってしまうことには私は避けたいという気持ちはありました。もちろん、他者にわかりやすく伝えることは筆者としての使命ではあるものの、だからといって皆が知っているラ

テンアメリカはこういうものだから、それに引きつけた教科書はやめようと。その結果、醍醐味や魅力がどこまで伝えられたのかは文章を読んでほしいです。

それから、音楽や他のいわゆるラテンアメリカを連想させるようなものに引きつけたものは、これからコラムを通じて少しずつ書いていきたいというのがあります。

受田先生のコメントに関して、まずアマゾンの環境保全の問題では、先住民運動を例に世界でも先駆的な政治的な実践や政策が展開されてきたわけですが、これは局地的なものに過ぎず、マクロなレベルでの社会を変えるには至っていないだろうと考えています。これに関することは『地球規模課題の実践』という本の1章で書いたことがあります。ラテンアメリカではいわゆる先住民の問題や環境運動の問題が一つの重要な課題ではあり、例えばブラジルのアマゾンの問題に対する環境運動活動やその戦略が他の地域に真似されて連帯の動きにつながったため、話題として取り上げられることがあります。他方で、宮地先生も「グローバル関係学」というシリーズのうち、トランスナショナルな動きに関する1巻の中で、むしろ先住民同士の横のつながりがうまく機能していないことを紹介していて、この二つの見方を捉えたとき、現実的には一つの方向で何か解を出そうとするもそれぞれ違った見方でそれぞれの地域で問題を解決していく多様性を持った解決方法というのも見出していくことも重要なことではないでしょうか。すなわち、マクロな見方で一つに収斂することも重要ですが、そうではない解決方法があってもよいのではないかと考えています。

鈴木先生のコメントは、ブラジルを研究するものとして非常に痛いところを突いていて、本当に勉強不足を痛感している次第です。ポピュリズムに関しては、さきほど宮地先生もお

伝えした通り、ブラジルの文脈およびラテンアメリカの文脈で説明する目的がありました。その点をふまえて返答すべきことが三点あります。

一点目は政治文化という表現に収斂させないで説明することです。この現象は他の地域と比べて、なぜラテンアメリカでその現象として発生しているのか。それはラテンアメリカが培ってきた文化なんだという説明をするとそこで収斂（自己完結）してしまいます。しかしその文化とは何なのかを説明する際に説明できる言葉がなく、言語化することができなければ、地域を勉強しているものとして他者に提示する役割を果たしていません。二点目は2000年代以降に起きているポピュリズムの問題とバルガス期に起きているポピュリズムには共通点もあるだろうとは思うものの、各時代で起きているものとして把握することも大切ではないかということです。三点目はポピュリズムという言葉が多様化することの危険性という、さきほど宮地先生が指摘したことについてです。特に3点目については様々な政治現象が起きているとすべてポピュリズムのせいだとしてしまうことや、ポピュリズムを経験的に説明してしまうと一般的な理解は深まらず、すべてがポピュリズムに見えてきてしまう問題があります。最近では、ポピュリズムの研究は定量的にも分析が進んでおり、ポピュリズムを限定的に捉えると、例えばルーラはポピュリストなのかという議論になります。またボルソナーロに関してもそうです。私は、もともとボルソナーロをポピュリストだと思っていないのですが、何でも決めつけるとそのようにみえてしまうリスクがおおくの誤解を生んでしまうことも避ける必要があるのではないのでしょうか。

池田先生のコメントに対してその通りだと思ったのは、ヨーロッパ政治の文脈で各国史に収斂されてしまって全体像を俯瞰する本があ

まりないという話です。これはラテンアメリカも同じなのかもしれません。今回ラテンアメリカとして位置付けた国は20ヶ国ですが、例えばラテンアメリカ・カリブ地域は33ヶ国あります。そのすべての国のことを教科書で説明しなければいけない使命があるわけですから。1冊を例えば半年の授業であるいは、1年の授業で説明するとき、できるだけ少ない量で最大限の効果がある説明ができるかが求められます。

その点を踏まえて歴史を振り返ったとき、もう一つできることがあるとすれば、これは固定観念にとらわれないように気をつけながらの話ですが、ヨーロッパ史や東南アジア史においても、横のつながりを意識しながら、全体像を把握することができれば、研究領域が広がるのではないかということです。先週、比較政治学会で類似したパネルがあり、地域研究と比較政治の間で議論したときにも何かと何かを比べると比べる対象が固定観点によるもので行われてしまう問題が増えてしまうという問題が提起されました。その前提を認めつつ、広い領域に関する新しい対象を発見して行くことはできるかどうか。例えばヨーロッパとラテンアメリカを比較することで、今までラテンアメリカだけで研究してきた人が見えないもの、ヨーロッパしか見てなかった人が見えてくるものを掴んでいくことから新たな研究領域を広げていくことができたらいいのではないか。そうした点も踏まえて様々な方にこの本を読んでいただきたいなと思っております。

* * *

質疑応答

残り15分程度ありますので、ぜひフロアの方やズーム上の皆様からも何かご質問等ありましたら、お受けしたいと思っております。いかがでしょ

うか。

鈴木：付け加えるのを忘れたことがあって。輸入代替工業化もやはり時期に対応していると思うんですね。この本ではポピュリズムも歴史的な一定期間の政治現象だとされています。ポピュリズムと輸入代替工業化はよくセットとして論じられます。ポピュリズムと輸入代替工業化が1960年代に破綻して、権威主義体制、軍政が出てくるというように。その軍政の経済開発政策も、この本ではどうも輸入代替工業化というふうに書かれているように私は読んだのですね。そのあたりはどうなのですか？

舛方：軍政に関しては、本書でも触れた通り、多様な在り方をしていると思っています。軍事政権と輸入代替を一つのまとめで説明するより、各国のその方針はそれぞれ違っているので、ブラジルならブラジル、アルゼンチンならアルゼンチン、チリならチリとわけたほうが良いだろうと判断しました。特にチリの場合は輸入代替の時期と軍政の時期は違うので、南米で共通した議論は中々できないし、その部分については本書では説明をしていません。特に輸入代替の話は宮地先生とも度々議論しましたが、どうしてもブラジルやメキシコなどの大国の視点から議論されてしまいますが。輸入代替を採用している国々は他にもあり、この政策がうまくいかなかったりする事例もあるので、各国がもつ多様性のもとで議論すべきことかなと思っています。

質問者①：どうも、大変参考になるお話ありがとうございます。私は企業で働いたものなので全くアカデミックと遠いんですけども、中国の存在というものは、どのように受け止めておられるのか、いま中南米各国において投資とか貿易とか相手国としても、それから政治的な影

響はどうだか分からないですけど、中国の存在はかなり大きくなっていて、負債も抱えている国も増えていると思うんですけど、その辺の記述はいかがでございましょうか。

宮地：中国については、この本でもわずかながら扱っています。21世紀に入って、中国はラテンアメリカ諸国の主要なパートナーになったのですが、中国をどうラテンアメリカの政治の中で評価するかをめぐっては、実は二人で考え方が全然違ったんですね。最終的には、本書で書かれている通り、中国との関係はラテンアメリカの政治にとってはチャンスであり、脅威であるというまとめに収まりました。具体的には、中国はラテンアメリカの貿易のパートナーであり、そこからもたらされる利益がラテンアメリカの経済を良い方向に導き、政治の安定化に役立つだろうという考え方がまずあります。しかし、その一方で、貿易の中身は何かといえば、ラテンアメリカが原料を輸出し、中国が製品を輸出するというもので、最終的にはラテンアメリカの産業の高度化につながらず、民主制を支える中間層が分厚くならない、そういう仕組みを中国が作っているのだという批判もあります。さらに、国際協力の観点から言えば、日本を含む援助プロジェクトの実施に先立っては、環境への影響など様々な審査が入るのに対し、中国の援助はそうしたチェックに乏しいという問題があります。現在、この簡便さがかえってラテンアメリカ諸国で受けているのですが、安易にお金が手に入ると、それを利用した汚職やグレーな取引が生じ、ラテンアメリカの政治の質を下げているという研究もあります。以上より、中国はプラスにもマイナスにも働くと言えるので、今後も双方の側面を見ていく必要があるかと私は見えています。舛方さん、いかがでしょう。

舛方：先週、私は中国の武漢市に訪問し、ラテンアメリカとアジアの研究者と両地域がいかに協力していけるかを話しあう機会がありました。その会合に参加した雰囲気として、中国がラテンアメリカとますます貿易を進めていきたいという大きな意気込みを非常に感じました。2000年以降からラテンアメリカの政権が中国と繋がりを強化する方向にあり、期待感が増えているという話もあります。特にラテンアメリカに左派政権が増えているような印象は健全な友好関係が構築されていることを「演出」しやすいこともあります。中国との実利的な関係が2010年代に進展し、2020年代にもよい雰囲気が続いているから、中国はラテンアメリカ進出を進めたいのだろうと思います。ただブラジルやメキシコ、コロンビアといった国々はやはりラテンアメリカの中でも中国との関係に対しては一定程度の距離をおき、主権を奪われないようにしたいという狙いはあり、一帯一路にも入っていません。中国の関与を最大限に受け入れつつ、利益を最大限にしていくラテンアメリカ諸国の姿勢が今後も続いていくのではないかと予想されます。

舛方：学生の皆様からもぜひコメントいただけたらと思います。

質問者②：博士後期課程の学生です。ポピュリズムのことが気になりながら、読ませていただきました。単純な疑問かもしれませんが、ネオポピュリズムについての言及がなかったのはなぜかお聞きしたいです。

宮地：はい、ネオポピュリズムは書こうと思っていたものの、最後に消しました。ネオポピュリズムとは1990年代のアルゼンチンのメネム、そしてペルーのフジモリの統治スタイルにつけられた概念です。ラテンアメリカのポピュ

リズムについて説明しました通り、政治を支配するエリートがいて、そのエリートと戦うために色々な階級の人が集まって、政治の権利を拡大したり、あるいは国家がもっと大衆のために福祉的な政策を行ったりするべきだという再分配重視の国を作る運動がポピュリズムです。これに対し、1990年代に見られたネオポピュリズムと呼ばれる動きは1990年代というネオリベラルの時代、すなわち国家の役割を縮小する時代にあって、再分配を求めるような大衆が非常に厚い支持を大統領に寄せている現象を指します。

この現象の説明としては、政府は大々的な再分配をしないものの、わずかながらでも利益供与はするものであり、生活に苦しい人がそこに群がるという指摘がなされます。この部分を捉えて、これは新自由主義時代のポピュリズムだ、過去の再分配型のポピュリズムとは違うのだという主張につながるわけです。

しかしネオポピュリズムを厳密に考えていくと、フジモリが当てはまるにとどまって、ラテンアメリカに広く見られる現象として記述ができないという批判があります。私もその批判が正しいと判断をしています。舛方先生、何かあれば……。

舛方：同感です。やはり教科書を作るにあたり、単純化された固定概念のもとで説明することを避けたかったわけです。ネオポピュリストの位置づけに関して、まずボルソナーロはネオポピュリズムなのかどうか、そうするとアルゼンチンのメネムもそうではないかと考えました。しかし、対象人物を加えていこうとすればするほど、それに当てはまる指導者の例はいくらでも思いつくことはできます。他方で、事例が多くなればなるほど概念の説明力が増えているようにみえて、実際はその概念の定義は非常に曖昧になっていく危険性を感じました。そこで

草案ではネオポピュリストにあたる人は確かメネムとフジモリの二人でしたが、厳密にはフジモリだけなので一事例だけで説明しようとし、そのうち、いやフジモリもやめようとなった経緯がありました。今までの本との違いを出したいということもあり、ネオポピュリストについて本書で取り上げなかったのは、ポピュリズムというもともとの定義に厳密にであった結果だと思っています。

質問者③：今日はお話しいただきありがとうございました。教科書を読ませていただく中で、出来事の間につながりがすごく分かりやすく書かれているという印象を受けました。国家形成について書かれた第3章、75ページにブラジルについての記述があると思うのですがけれども、ラテンアメリカ全体で保守派と自由派のせめぎ合いが、非常にその後も重要になってくるポイントだと理解しました。ブラジルは保守主義が国政の基本となった珍しい例であるとしてあって、要は君主制が長く続いたとあります。ラテンアメリカの他の国々と比較したときに、特異な事例だと思うのですが、これはどうしてなんだろうというのが疑問です。単純に考えるとやはりブラジルというのは王室がリオデジャネイロにやってくるという、特異な経験をしたという影響が大きかったのかなと思いつつも、そういったことで説明できるのでしょうか。先生が教科書を書かれる上でその辺りをどういうふうに考えていたのかということをお伺いしてもよろしいでしょうか。

舛方：第1章と第7章までが宮地先生が担当で、第8章から私が担当という分担になっていますが、ブラジル政治に関することなので、私が返答します。おっしゃる通り王政が成立したのが大きいのかなと思います。ブラジル国内の中でも他国とラテンアメリカの国々との違い

はそこにあるのではないかと。ブラジルは国内に自由主義が導入されるまでに非常に時間がかかった国です。それは奴隷制度の廃止が遅れたという点でも同様の議論ができるのではないのでしょうか。ブラジルは表面的には大衆層が多いから左派やリベラル派が多いという認識になりがちですが、ブラジル全体を捉えると保守層の多さが際立っています。

これは歴史的な経緯によるものなのではないかと考えています。

舛方：定刻になりました。まだまだ質問があるかもしれませんが、最後に〔東京外国語大学〕出版会の編集者であります大内さんからコメントを頂戴したいと思います。

大内宏信：それでは手短にお話させていただきます。本書の編集を担当させていただきました、東京外国語大学出版会の大内と申します。本日はいろいろと示唆に富んだお話、そして議論を伺うことができ、本当にありがとうございました。

本書の企画について、舛方先生から最初にお話を頂戴したのは、2020年の5月頃、ちょうど新型コロナウイルスの緊急事態宣言が出て、世の中が騒然とし、なおかつどんよりした雰囲気のときのことで、そのときの舛方先生は、今日もそうでしたが、目をキラキラと輝かせるように、「宮地先生と二人で計画しているこの新しい概説書が、とにかく今の世の中に必要だから」ということでお話しされ、すごく元気をいただいたのを覚えております。

本書が刊行された今は、ラテンアメリカ諸国に共通する経験と、それぞれが示す政治的特徴の多様性を、国際社会の中にどのように位置づけるのか、また世界史の流れの中にどのように位置づけられるのかということについて丹念に追いかけられた、たいへんな労作であ

ると、あらためて感じております。私自身、研究者や専門家ではなく一読者として、編集段階から拝読することのできた立場としましては、本書に書かれた、ラテンアメリカ諸国の政治的経験が、今の世界で起きている出来事にさまざまに接続していく感じ、日本や欧米諸国なども対比しつつ、ラテンアメリカの政治史を丹念に追いかけた本書の記述・論述を読む中で、今の世界で起こっていることの「読み直し」のきっかけを与えていただいているような感覚があり、非常に興味深く受け止めております。

ようやく2023年3月末に本書が刊行され、その後4月からすぐ、大学の教科書として使っていただくという慌ただしいスケジュールだったことを考えれば、現状、非常に順調に教材としてご使用いただけていると思いますし、また同時に、それだけでは説明のつかない一定数の読者の方々、大学の教科書としての読者だけではない方々に、確実にご購入いただけている状況があります。本日の活発な議論でもさまざまに勉強させていただきましたように、ご指摘を含め、基本的にとっても前向きな受け止めを皆さまにもしていただけたこと、本当によかったと思います。また、本日のお話の中にもありましたが、本書の工夫の一つとして、「本書に関連するウェブ資料」(<https://wp.tufs.ac.jp/tufspress/books/book79/>)においては「補足資料」(<https://lapitw-tufs.blogspot.com/>)が追加更新され、より充実していく予定です。今後、秋学期や来年度に向け、教科書としてさらに広くお使いいただきたいと思いますし、ラテンアメリカに関心のある方々だけではなく、世界史の読み直しという意味でも、より広い読者の方々に読んでいただけたらと思います。本日お集まりくださいました先生方、皆様方もぜひ周りの方々に本書をご紹介いただければと思います。本日はありがとうございました。

舛方：大内さん、ありがとうございます。振り返ると出版までに4年かかりました。私自身、筆が全然進まず、大内さんに我慢してもらった時期もあり、出版社の方と二人三脚で一緒に走ってきたからこそ、本が出版できました。こうした経緯からも本を出版することの意義を改めて感じた次第です。今回の合評会を通じて再確認しましたが、出版したら終わりではなく、これからも歩み続ける必要があると思っております。引き続き、本書を販売していくとともに、皆さんに本書を手にとってもらって、ラテンアメリカのことや世界のことを知ってもらうきっかけになってもらえたら嬉しいです。今日は長時間にわたり、議論に参加してくださいました皆さま本当にありがとうございました。引き続き、こうしたセミナーを開催していきたいと思いません。

【参考文献】

高橋均・網野徹哉(2009)『世界の歴史 18 ラテンアメリカ文明の興亡』, 中公文庫.

恒川恵市(2009)『比較政治—中南米』, 放送大学教育振興会.

舩方周一郎(2021)「地球環境政治におけるラテンアメリカの役割 世界に発信する二一世紀の持続可能な開発」, 畑恵子・浦部浩之編『ラテンアメリカ 地球規模課題の実践』, 新評論, pp.60-78.

舩方周一郎・宮地隆廣(2023)『世界の中のラテンアメリカ政治』, 東京外国語大学出版会.

宮地隆廣(2020)「トランスナショナルな運動の成功と国際的規範の揺らぎ—ラテンアメリカ先住民の事例」, 五十嵐誠一・酒井啓子編『グローバル関係学7—ローカルと世界を結ぶ』, 岩波書店, pp.138-157.

柳原孝敦(2007)『ラテンアメリカ主義のレトリック』, エディマン.